

雪氷研究大会 (2008・東京) 報告

(2008 年度日本雪氷学会全国大会報告)

日本雪氷学会副会長 (雪氷研究大会 (2008・東京) 実行委員長) 成田 秀明

東京大学工学部 (同上 実行副委員長) 山口 一

日本大学理工学部 (同上 実行副委員長) 半貫 敏夫

1. はじめに

日本雪氷学会と日本雪工学会は、2005 年度より始めて 3 年度にわたり「雪氷研究週間 in 旭川」, 「雪氷研究秋田大会」, 「雪氷研究富山大会」の名称の下, それぞれの全国大会を同時 (一部連携) 開催してきました。その間, 各大会に対するアンケート調査から判明したように, 両学会の会員意識は, 協力関係を更に一步進めて大会運営の完全合意を希求するようになりました。かくして, 合同運営実現のための準備会議を 2007 年度後半より立ち上げ両学会の抜本的な歩み寄りを図りました。

2008 年度大会は雪氷研究大会 (2008・東京) の名称で, 2008 年 9 月 24 日～27 日の日程で, 東京大学本郷キャンパスにおいて開催される運びと成りました。以下に本大会の準備から実施に至る過程を, 反省も含めて, かいまんで報告いたします。今回, 大会の合同運営のため幾つかの重要な変更を行いました。文中, それらの点についても触れますので注意して読んでいただければ幸いです。

2. 大会準備

2.1 実行委員会等活動

本大会の準備は 3 段階に分けられます。第 1 段階は会場選定の期間 (2007.5 月～9 月) であり, 日本雪氷学会関東以西支部役員が手分けをして, 東京都および隣接県の会場の設備・利用料等諸条件を精査しました。首都圏には会議施設も数多くありますが, 利用者も多く競争が激しいこと, 申込み期間や申込み資格などの制約が厳格なこと, 有名な会議施設は利用料が高い等々, 色々なハードルがあることが判りました。幸いなことに, 夏休み中であれば, 施設の整った東京大学工学部の講義室等が利用できること, 大会に協力可

能な教官数名が東大工学部と農学部に住居されることが判明しました。

第 2 段階では, 会場がほぼ東京大学に確定したところで両学会代表による合同幹事会を開催し, 前述のように共同運営に向けての基本的な取り決めを行い, 開催日程の大枠を決定しました。さらに, この会議の場でそれぞれの学会より実行委員候補者の推薦をしていただきました。

第 3 段階が実行委員会の活動期間ですが, 実行委員会には最終的に 39 名の方が参加して下さり, 2008 年 4 月より毎月会合を催し, 詳細事項を検討してきました。

2.2 会場選定の経緯

会場選定は最重要な課題であり 2007 年度始めより東京周辺の公的な会議場, 大学, 研究機関の会議施設を比較検討しましたが, 最終的には以下の理由により, 東京都文京区本郷在の東京大学工学部 2 号館が採択されました。

- ・交通の便がよい
- ・会場使用料が比較的安い
- ・3 会場 (講義室) で 3 セッションを並行実施できる上, ポスターセッション, 技術展示場なども同じ建物内に設けることができ, 参加者の移動が容易
- ・施設が新しく, 液晶プロジェクタなど AV 設備も講演会場に備え付けられているため, 講演会などを行うのに便利
- ・講義優先が大学運営の原則だが, 講義のない夏休み中であれば, 多数の部屋が使用可能となり大会開催上有利
- ・懇親会も会場に近い生協食堂で開催でき, 参加者の移動も容易
- ・学内に生協売店, コンビニ・食堂など各種のア

メンティーが備わっている

2.3 合同運営に向けて

実行委員会編成に先立ち、両学会を代表する少数メンバーによる合同幹事会が設立され、両学会理事会と連携しつつ協議が行われました。昨年までのアンケート結果から、日程の短縮が最優先の急務であることが確認されました。この解として、比較的早い段階で、口頭発表セッションを統一することが合意されました。そうなると要旨集の統一、さらには参加費をはじめとする費用の額と会計処理の統合が必然かつ唯一の解として浮かび上がり、これらについても提案を行い両学会から諒承されました。このように基本方針について早い段階で合意が得られたために両学会の連携はスムーズに進んだと言えます。また、この機会に、次年度大会以降の両学会の連携を調整する常設の仕組みが確立されました。

2.4 発表登録・大会日程

参加・発表登録手続きから研究発表全てについて、平等な統一方式で開催するのは今回が初めてです。発表登録手続きは原則として Web 上から行われ、講演要旨は著者自身により、独立行政法人科学技術振興機構が運営する予稿集公開システム J-STAGE に入稿されました。発表登録は、入力する項目が多く、講演要旨の記載項目と一致しない場合等、担当者によるチェックが必要でした。入力項目について不満もあると思われそうですが、利用料が無料であること、データベースの公開を前提としていることなどから、今後も大きな変更の可能性は少ないことを考慮していく必要があります。口頭発表およびポスター発表の全申込数は 233 件で、そのうち要旨の著作権譲先を雪氷学会とした発表が 190 件、雪工学会が 43 件でした。事務局による代行登録は 2 件でした。発表を希望する研究分野については、各学会の現有の分野を単純に併合したため、33 分野と多くなり過ぎたようで、今後、見直しが必要と思われます。

大会案内 (2) に記載した当初の大会日程ではポスターセッションを 3 日目に予定していましたが、VIP 賞の表彰式を 2 日目の懇親会時に行う提案がなされ、発表登録手続き後に初日に変更したため、全日程参加できない申込者から問題点の指摘を受けました。今後の反省材料としたいと思

ます。研究発表のプログラム編成、座長の選定・依頼作業は、両学会の実行委員の協力により大きな問題もなく実施できました。

3. 大会の概要

大会期間は 4 日間で、はじめの 3 日間は学会本来の主目的である研究発表と各種のオーガナイズドセッションに、第 4 日 (土曜日) には、一般社会人向けの公開講演会ならびに青少年向けの公開イベント「雪氷楽会」(科研費補助事業) を開催しました。公開講演会は従来は大会 2 日目午後に行われていましたが、今回は一般人の参加しやすい土曜日午後開催しました。その結果、3 日間の時間枠の中で、研究発表、オーガナイズドセッションの時間割が組みやすくなり、かつ 1 件当たりの口頭発表時間も拡張することが出来ました。

研究発表の場としては、数年前に増改築された工学部 2 号館 1 階に在る大中小 3 つの工学部共通講義室を用い、2 階の展示室、および 3 階の大教室をポスター発表会場に利用しました。両学会の委員会等、多数の各種会合および実行委員会本部のためには、2 号館のセミナー室、隣接する 3 号館の会議室も適宜利用しました。



写真 1 交流広場の風景

2 号館の 2 階にある広大な吹き抜けの交流広場において企業展示 (8 社出展) を行いました。ここは参加者の交流と憩いの場所としてすこぶる好評でした。公開講演会は本郷通りに近くアクセスに便利な農学部弥生会館一条ホールで開催しました。

講演要旨集は、今回両学会のご理解を得、A4 版となり、フォーマットも新たに制定されました。大会日程・発表プログラム・企業広告などを

詳しく掲載した「大会案内」も要旨集に合冊すると共に、別刷りを多数印刷し、要旨集を購入しない一般参加者、賛助団体等大会関係者に配布しました。大会と公開催事をPRするためのポスターをデザイン外注し、400部程度を博物館協会、賛助団体、都内の高校等に配布しました。しかし、ポスターのPR効果がどの程度であったのかはよくわかりません。

受付の集計では、本大会の参加者総数は410名、懇親会参加者は255名に達しました。

3.1 研究発表



写真2 研究発表の様子

a. 口頭発表

口頭発表は28セッション、122件（内キャンセル1件）の発表が大、中、小の3会場で行われました。3会場の定員は90-340名で、過不足なく、また、それらの施設は大変優れていたと概ね好評でした。総投稿数が過去3大会の2つの学会の合計発表数に比べ少なかったため、口頭/ポスターを指定しなかった申込者には口頭発表にさせていただきました。また、1件当たりの発表時間は、比較的長めの15分（発表12分、質疑応答3分）に設定しました。大半の発表がPCプロジェクターによる発表で、全会場で左右2つのスクリーンに同じ画像を投影したので、大きな会場でも発表が見やすかったと思われます。発表ファイルは、例年通り発表前に専用PCにアップロードしていただきましたが、これによる混乱はほとんどありませんでしたが、一部自分のPCを使用した発表で、画面が乱れることがありました。

b. ポスター発表

ポスター発表は111件が、理学系と工学系に分

けて、2会場で行われました。ポスター展示は大会初日の10:00~17:00までとし、プログラムの奇数番号、偶数番号でコアタイムを分けて各1時間30分の発表を行いました。

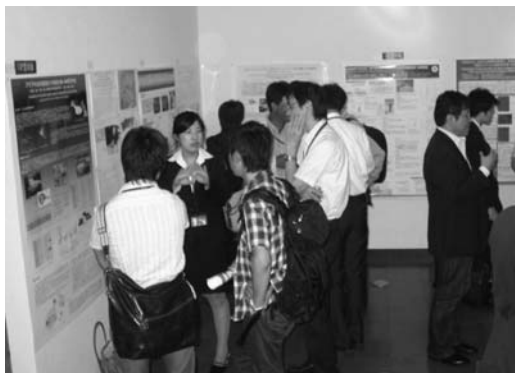


写真3 ポスター発表会場の様子

大半はA0プリンタによる大判のポスターでした。各ポスターの展示スペースとして幅90×高さ180cmと通知していましたが、幅90cmを超えるものが多かったようです。このため、P1会場では隣接するポスターとの境界線が犯され、遅れて展示した発表者の中には十分な展示スペースが得られない方もいました。P2会場は展示パネルをレンタルしたために隣接するポスターとの境界が明確で、展示スペースの問題は生じませんでした。しかし展示パネルの納入が遅れたために、パネルの設営を発表者に手伝っていただく事態となりました。今回のポスター発表会場は、2会場用意したこととコアタイムを分けたことで、発表者、討論者のスペースはぎりぎり何とか確保することができ、大過なく実施できたと判断されますが、今後は展示スペースにより十分な余裕を持たせ、会場設営を遅滞なく行うことが望まれます。

3.2 VIP賞

樋口敬二氏（日本雪氷学会顧問、名誉会員）の資金提供によるVIP賞（Very Impressive Presentation賞）の選考は今年で6回目となりました。今大会では両学会会員（35歳以下）の参加を求め、授賞対象をポスター発表のみとしました。発表登録時にVIP賞の選考候補となることを自己申告してもらい、選考委員に採点していただきました。20件の候補の中から、最優秀賞1件と優

秀賞 2 件が選考されました。表彰式を懇親会の最中に行い、より多くの方に周知できるようにしました。

各賞の受賞者及び発表題目は次の通りです。

- 最優秀賞：永塚尚子氏（千葉大学大学院理学研究科）「アジアの氷河表面の不純物の Sr, Nd 同位体比」
 - 優秀賞：櫻井俊光氏（北海道大学大学院環境科学院）「南極氷床 Dome Fuji コア深部に含まれる微粒子とエアハイドレートの分布」
 - 優秀賞：中澤文男氏（国立極地研究所/新領域融合研究センター）「南極雪試料の花粉分析」
- 副賞としては東京にちなみ、「江戸切子」と「とらやの羊羹」が贈られました。

4. パネルディスカッション

雪工学会主催行事としての公開パネルディスカッションは「都市・建築空間における雪氷災害のリスクマネジメント」および「積雪寒冷地における ITS 技術の活用可能性」の 2 課題が大会 2 日目の 9 月 25 日に一番広い会場を用いて行われました。従来に比べて会場が広すぎることが心配されましたが、それなりに埋まり（写真 1）、パネリストの解説に引き続いて活発な議論が交わされました。



写真 4 パネルディスカッションの様子

5. オーガナイズドセッション

本大会では、日本雪氷学会の分科会会合を両学会会員が平等に聴講できるようにするとともに、大会参加者の複数分科会参加を可能にするため

に、並行同時に開催するセッションは 3 つまでとして、分科会を 3 日間にわたり実施しました。実施方法は、各分科会に 120 分を割り当て、始めに 90 分間のオーガナイズドセッションを行い、その後 30 分を総会時間としていただきました。この旨を 4 月中に予め各分科会に通知すると共に、学会誌 5 月号の大会案内 (2) でオーガナイズドセッション化の案内及びセッション概要募集の案内を流しました。各オーガナイズドセッションの概要、発表者及び講演タイトルを講演要旨集と大会案内に掲載する都合上、分科会申込の期日を 7 月末としました。

本大会の各分科会主催オーガナイズドセッションには、これまでの大会より多くの参加者が集まりました。しかし一部のセッションはこれまでの分科会開催形式と変わりがなく、大会発表と重複する部分もあったように見受けられました。今後さらに分科会の活性化を進めるためには、オーガナイズドセッションのテーマを各分科会からの提案方式にして、各オーガナイズドセッションの発表者も大会と同じ事前公募式にすることが望ましいと考えられます。これを実現するためには、分科会の募集時期を従来より早める必要があると考えられます。

6. 公開講演会

大会最終日、土曜日の午後、農学部弥生講堂一条ホールにおいて「今、地球の雪と氷に何が起きているのか？—地球を旅しながら、温暖化の影響を探ろう—」が開催され、講演 4 題：「北極海の海水変動を探る」榎本浩之氏、「南極氷床は地球温暖化で融けだしている？」本山秀明氏、「地球温暖化とヒマラヤの氷河」上田豊氏、「日本の雪の変動と雪害」佐藤篤司氏、が 2 時間半に亘って行われました。参加聴講された方々は 128 名（大会参加者 78、社会人 50 名）に達し、まずまずの入りと成りました。公開講演会の PR は大会ホームページ、ポスター送付、ダイレクトメール、関係機関等のメーリングリストなどを通じ多角的に行いましたが、新聞・テレビなどの公共マスメディアは利用しませんでした。（大新聞等では、大会ホームページ等で案内が既に公表されている行事は事前のニュース記事としては対応しない由。ただし、

当日の取材はあり得る。）

7. 企業展示

大会初日の24日13時から26日の14時まで、工学部2号館2階の広大な吹き抜け空間を持つフォーラムスペースの中で、横には軽食店がある交流広場を囲むように、8企業・団体の展示パネルと展示品が配置され、専門的な技術紹介の場を設けることができました。



写真5 企業による展示の1例

吹き抜けのため、強風に見舞われてつらい思いをされた一部企業はありましたが、展示品の風速計やデータロガーが実際に動く様子を、説明にうまく活用されている様子でした。大会参加者は、お昼前後の軽食店での買い物、交流広場でのテーブルを囲んでの歓談・打ち合わせに利用し、また、この場所は発表会場とポスターセッション会場の間に位置する等、人の流れが頻繁にあって、展示には大変良い場所でした。比較的ゆったりとした中での展示説明は、混雑感もない代わりに、ややもすると閑散とした雰囲気も見られました。

会場に設置された吊り棒（上下移動可能）と常設掲示板を活用して、スチレンボードの展示パネルを配置しました。このスチレンボードは、エコに拘ってリサイクルの市販品を購入したものです。また、たくさん展示品は、すべて宅配便を活用して会場までスムーズに搬入搬出ができました。出展頂いた8企業・団体の関係者の方々をはじめ、大会参加者皆様のご協力に感謝いたします。

8. 懇親会

大会2日目の宵に大会会場に近い学生食堂を利用して懇親会が開催されました。参加者は合計255名で満員の大盛会でした。地方開催では、自治体要人を招くことが多いのですが、今回は首都開催のため、仰々しいことは避けて、学会関係者のみの会といたしました。



写真6 懇親会の情景

冒頭、大会実行委員長、両学会長よりのご挨拶、楠宏様の音頭での乾杯後、くつろいだ雰囲気での歓談となりました。会の中程では前日行われたポスター発表のVIP賞選考の発表があり、前述の3氏への授賞が行われました。最後に、次期大会の実行委員長（予定）苦米地司様（北海道工業大学教授）より2009年度大会（候補地：札幌、北海道大学）のご案内がありました。今回は参加費を抑えて経費節約に努め、アトラクションも省きました。このため、懇親会では飲食物が不足し、十分に胃袋が満たされなかった方が少なからず居られました。今後は、飲食物のボリュームと参加費用とのバランスを取って開催することが望まれます。

9. 式典

9.1 雪氷学会授賞式

2008年度の雪氷学会賞は、学術賞、技術賞の推薦は無く、受賞者および功績は以下のごとく選考され、大会初日の式典において雪氷学会会長より賞状とメダルが授与されました。

平田賞：竹内由香里氏（森林総合研究所）

「積雪物理量測定手法の改良と斜面積

雪安定度の研究」

功績賞：対馬勝年氏 (富山大学名誉教授)

「雪氷の摩擦や利雪の研究・教育と学会運営への功績」

論文賞：隅谷大作氏, 上田保司氏, および生頼孝博氏 (株式会社精研)

「曲面における砂凍土の凍着に関する基礎実験」

9.2 雪工学会開会式と記念公演

恒例の日本雪工学会大会開会式は9月24日午後1時からB会場で行われました。合同大会が順調に運営されている現在, このセレモニーの本質的な役割は後半の学会賞記念講演に移っています。会は沼野総務委員長の司会で始まり, 植松康会長が挨拶に立って, 「雪氷研究大会」として全国大会を合同開催する意義と, その中で雪工学会の果たすべき役割を述べ, 学術研究, 公開パネルディスカッションが有意義かつ活発に行われる事への期待で締めくくりました。引き続いて平成19年度雪工学会学術賞受賞の阿部修氏 (野外観測に基づく建築物の雪害防止に関する研究), 同学術奨励賞受賞の藤本明宏氏 (熱・水分収支型路面雪氷状態モデルの開発) の講演があり, 活発な質疑

が行われました。

10. おわりに

本大会は, 2学会の本格的な合同大会とすることが最大の眼目で, 準備作業はそれなりに時間と労力が掛かり, 準備委員, 実行委員になって頂いた方々には従来以上の負担が掛かったと思いますが, 大きな意見の相違も争いごともなく, 無事に済んだことはひとえに, 過去3年の経験を経た両学会の皆様の融和を願う真摯な心がけの賜でしょう。お陰様で, 大会参加条件の統一, 講演要旨集の合冊化など, 合同運営の基礎がほぼ固まったものと考えております。しかし, 細部については少なからず遺漏があることも事実です。これらの点については, 詳細な反省録をとりまとめ, 次期実行委員会および各学会の事業委員会に引き継ぐことといたします。

また, 本大会は, 多くの協賛企業・団体のご厚志による企業展示および広告掲載というかたちで, 財政面を手厚く支えて頂きました。末筆ながら, 改めて御礼申し上げます。

(2008年11月29日受付)

雪氷研究大会 (2008・東京) に関するアンケート調査結果

雪氷研究大会 (2008・東京) 大会実行委員会 成田秀明

雪氷研究大会 (2008・東京) の運営を参加者がどのように受け止めてくれたかを把握し, 今後の運営のあり方を探るべく, 前年の富山大会に続いてアンケートを実施しました。回答者は95名に達し, まずまずの回答率でした。

日本雪氷学会と日本雪工学会の全国大会を同時期に同じ会場で開催するという企画は3年前の旭川大会ではじめて実行に移されました。この「同時開催」の方針は秋田, 富山大会に受け継がれ, ほぼ両学会参加者のコンセンサスを得られているとの判断に立って, 今回の東京大会では本格的な「合同

大会」を目指して大会運営を行ってきました。

アンケート結果を概観すると, 実行委員会の目指すところは概ね参加者の賛同を得られたと判断できます。

特に大会運営の会計窓口をひとつにして, 「合同大会」として一括処理したこと, 大会の学術講演要旨集を統一したことは実行委員会の「改革的な提案」のひとつでしたが, 参加者には好評をもって受け入れられたことは特筆に価すると考えています。

とはいえ, まだ多くの改良すべき点が残されて